北から南から

# 津波模型班　11年目を迎え 津波防災の啓発活動

岩手県立宮古工業高等学校
実習教諭　山野目　弘

## 1 はじめに

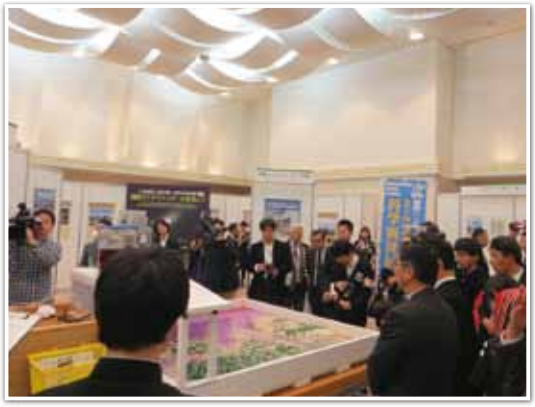
三陸復興国立公園（旧陸中海岸国立公園）は、東日本大震災により被災した三陸地域の復興に貢献するために平成25年５月に創設された国立公園である。南北の延長は約220㎞、北部は「海のアルプス」とも賞される豪壮な大断崖、南部は入り組んだ地形が優美なリアス海岸を形成し、宮古市はそのほぼ中央部に位置する。また、公園一帯は世界三大漁場の一つに接し、国内有数の漁場でもある。反面この地方は、古来より津波被害を受けやすい地域である。津波は忘れた頃に襲い、大災害をもたらし、多くの人命を奪ってきた。明治三陸津波から119年、昭和三陸津波から82年、チリ津波から55年が過ぎ、年月が経つとともに津波は過去のものと記憶が薄れ、あの東日本大震災までは風化の一途をたどっていた。

## 2 概　要

本校は、本州一サケが遡上する津軽石川に隣接し、昭和48年４月に開校し、これまでに5,000名を超える卒業生を輩出している。当地のコネクター産業は、地場産業の一つとなっている。その中で働く、技術者やオペレータなどは本校出身者が多く企業の大きな原動力となっている。機械科、電気電子科、建築設備科の３学科があり、野球・サッカー・ラグビーグランドや実習棟が整い、恵まれた教育環境の中で生徒は勉学や部活動に励んでいる。今回は、このような環境の中で本校津波模型班の取り組んできた活動について報告する。

宮古市の雄大な海岸展望

津波模型班は「忘れてはいけない津波」を記憶に残すため、平成17年からそれぞれの地区に応じた陸地と海底部を合体した立体模型と、それに造波装置を付けて疑似的に津波を発生させる装置を完成させた。小さい津波では防波堤の機能を確認できる。また、大きい津波が街や地域を襲う様子とその被害状況が簡単に理解できるようになっている。この模型で津波を疑似体験することで、津波発生時の対応や危機意識を高める啓発活動を行ってきた。今年、この活動を始めて11年目を迎え製作した津波模型は11基になる。当初は、地域の防災教育の一環として小・中学校で出前授業を行ってきた。東日本大震災後は、関西地方を含め、大学の先生方や学生など多くの方々の前で実演することができた。また、実演会と同時に過去の津波被害の様子などを紹介するとともに、安価に製作できる津波模型の作



2015年 第３回国連防災世界会議

り方についても説明してきた。現在（平成27年11月 ）までの実演回数は129回となる。

## 3 模型製作について

### (1)模型製作

３年生は４月から模型を１か年を要し製作する。卒業式を迎える頃、津波模型は完成する。翌年から完成した津波模型を使って後輩は実演会と併行して新たな津波模型の製作を始める。我々はこの先輩から後輩へと引き継ぐ活動を「伝統啓発活動」と称して11年間継続してきた。

### (2)疑似津波発生装置について

この装置で疑似津波を発生さる。アクリル製津波発生装置のタンク部に水を蓄え、下部の蓋が開くことにより水が流れ落ち、波長の長い津波が発生する。

## 4 津波実演会について

津波実演会では、陸地が津波にのみ込まれる様子を直接見てもらうことにより、速やかに避難することの大切さを学んでもらっている。その他に、過去の津波被害の様子を当時の写真をプレゼンテーションで紹介し、津波や地震発生のメカニズムや模型の作り方も併せて紹介している。

## 5 これからの活動

小・中学校での実演会や各所でのイベントを大切に継続していく。また、アンケートの結果から、実演会や模型の作り方を多方面に伝授する活動を推進していきたい。

2012年９月震災後、小学校で初めての実演会